臨床薬理学会海外研修員報告

（研修経過報告第１報）

鈴木豪

Department of Kardiologie und Pneumologie
Universtätmedizin Göttingen（UMG）

１はじめに

私は 2017 年９月からドイツ Göttingen (ゲッチンゲン)にあるゲッチンゲン大学の Kardiologie und Pneumologie、Professor SD Anker, Associate Professor Stephan von Haehling のラボで研修を開始しました。今回の留学に関して、日本臨床薬理学会の海外研修員に御選考をいただき貴重な経験の機会を与えていただいたことに深く御礼を申し上げます。

日本では東京女子医科大学病院循環器内科にて臨床経験を積み、心臓移植認定施設である同院にて重症心不全の治療に関わってきました。その中から心不全における心身的問題、食欲低下、るい痩、骨格筋萎縮のメカニズムに大変興味をもち心臓リハビリテーション学も合わせて臨床の現場からの clinical question を基礎研究や biological な観点から研究したいと思うようになりました。そのような流れでこの分野では先進的な研究を行っているグループを要するゲッチンゲン大学を研修施設として希望するに至りました。

２．研修施設と研究内容

私の所属する UMG は Klinikum いわゆる大学病院です。私の研修は基本的に基礎に重きをおくことにしているため直接患者様に接する予定はありません。

同施設は多くの多施設共同研究に参画しており臨床系、基礎系共に留学生も多く所属しています。私の前任は２名の日本人研究者が在籍していましたが、現在日本人は私のみで、現地の大学院生やポスドクのほかブラジル、メキシコ、スペインなどからの研究生が所属しています。２週間に１度の頻度でチームミーティングも

あり、自分の研究テーマや up-to-date な論文抄読会など自由な意見交換の場もあります。私は昨年参加して以降、基礎実験の準備をする期間、この会で丁度 New England Journal of medicine に subclinical hypothyroidism に薬物介入を行った TRUST trial という試験の結果が publish された頃でしたので、その発表を行い、そこから得られた議論を元に review article の投稿を行いました。

基礎実験に関しては、研修を開始した昨年 12 月に第 10 回 World Cachexia conference(当施設の head が主催する研究会です)がローマにて行われ、その際、Improved muscle fiber diameter and motor neuron number by s-oxprenolol treatment in a mouse model of amyotrophic lateral sclerosis という演題を発表する機会がありました。この研究自体は前任の研究者が行っていたものですが、これを引き継ぎ s-oxyprenolol がヒト膵臓癌での cahexia の骨格筋モデルにおいて MAFbx および MuRF-1 といった catabolic factor に対してどのような作用を及ぼすかを解明するテーマについて実験が始まったところです。基礎ではなく臨床で長く業務を行って来た私にとっては最初から困難の連続ですが次に繋がるよう現在奮闘中です。

３　ドイツ　ゲッチンゲンの生活

私が渡独した９月は丁度サマータイムの観光には最高の時期でしたが、現地では１０月のサマータイム終了に伴い急激に日照時間が減り、曇りと雨がほとんどの毎日が延々と続きました。基本的にドイツは日本よりも緯度が高いため日本よりも１０度ほど気温は低く、現在３月ですが厳しい寒さが続いています。

私は事情により予定滞在期間中は単身での留学生活であり、時差は８時間（サマータイムは 7 時間）あるため毎日 skype などで日本の家族と連絡をしている日々です。

ドイツは都市によって家賃などの状況がかなり異なりますが、ここゲッチンゲンは人口約１０万人の小さな地方都市で家賃などは安いです。しかし大学やマックスプランク研究所など研究として知と創造の街として有名なことから留学生や研究者が短期間で出入りし、そのため住居探しは非常に大変でした。

日本人会メーリングリストもあり約１００名の日本人とその家族がいるようです。仕事は主に英語ですが、現地のドイツ語学校にも夕方コースなどを探し通っています。

４終わりに

ドイツに来て早くも７ヶ月が経過しようとしています。かなり異なる食生活にも慣れ、暖かいサマータイムももうすぐに近づいています。私にとっては基礎研究にまだなれる時間、奮闘の必要が大いにありますが臨床医として生きて来た自分にとって２度とない経験であり限られた時間を無駄にしないように最大限の努力をしていきたいと思います。

最後になりますが、改めてこのような機会を与えていただきました日本臨床薬理学会海外研修員制度委員会の皆様に感謝申し上げます。